Katsuryoku Company ❶

# にいがたの明日を担う

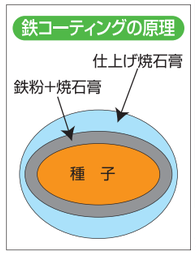
活力企業

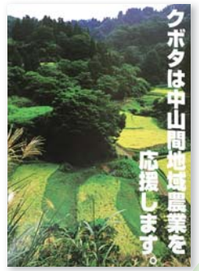
## 株式会社 新潟クボタ

新潟市中央区鳥屋野三三一番地●代表取締役社長／吉田 至夫さん

『活農プロジェクト』を推進する新潟クボタでは、『鉄コーティング湛水直播』をはじめ、耕作放棄地を有効活用しようと親会社のクボタに賛同し、『eプロジェクト』に取り組む。

鉄コーティングされた稲の種子。鉄でくるむと、種子の比重が大きくなり、水中でも自ら沈み、スズメなどの鳥害を大幅に軽減。土中でなく表面に播種することができる。





株式会社 新潟クボタ
吉田 至夫 社長

PRESIDENT

### いたるところに青山あり

「鉄コーティング湛水直播について研究してくれないか」。株式会社新潟クボタ・吉田至夫社長のもとに旧知の農家から連絡があったのは、社長就任の翌年、平成十五年のことだった。

種子を直接、水田に播く田植え法は、アジア全般で行われている一般的な農法だ。緯度の高い日本では、稲の生長を速めて収穫しなければならない。植物は移植すると生長が速くなる。そこで一度、ハウスで育苗し苗を箱に入れ、田植機で田に移植する、世界でも特殊な田植えが日本で普及した。『鉄コーティング湛水直播』とは、ハウスで育苗せず、鉄をまぶした種子を直接、田に播くことで苗作り作業をなくし、コストを抑える農法として開発された。「しかしなぜ、田植機を販売する我が社に直播研究の依頼を?」。そんな社内外での疑問に吉田社長は答えた。「当社は農家の皆様と共にある。故郷新潟は日本の食糧を支える農業県だ。農業が元気になることなら何でもしようじゃないか」

昭和五十八年、東京の大手経済新聞社の記者を辞め、家業継承のため帰郷した。「現場ありき」を信条とする同社で最初に配属されたのは佐渡営業所だった。当時、車も通らない山道を山頂にある農家まで乾燥機を担いで登った。「ありがとう。感謝します」。そのとき振る舞われた天然わさびの味は今も忘れない。平成九年、米価急落、減反強化で会社経営が苦況に陥った。収益回復を目指し、陣頭指揮を執る吉田社長(当時専務)に関連メーカーや農家は惜しみない協力をした。「この素晴らしい人々が働く故郷新潟の農業に骨を埋めることこそ我が使命」。吉田社長は胸に誓った。

平成十六年、新潟クボタは活力ある新潟の農業を創造しようとする『活農プロジェクト』の一環、『鉄コーティング湛水直播』の技術提供を開始。現在では、栽培面積が全国で一〇〇〇ヘクタールを超える規模となった。また『新潟クボタ大豆研究会』を結成。収穫量三百kg／十アール以上、Aクラス品質の大豆を安定生産する『大豆三〇〇Aプロジェクト』を積極的に推進している。

吉田社長は社長室に掲げる前クボタ社長・三野重和氏の揮毫による書「雄飛」に目をやり語る。「人間(じんかん)到るところ青山(墓)あり。世の中その気になれば、どこにも生きがいがある。だから故郷を離れ、世に『雄飛』するのに躊躇してはならない。書は江戸末期の僧、釋月性(しゃくげっしょう)の詩『將東遊題壁(まさに東遊せんとして壁に題す)』からとった言葉です。異常気象、食糧自給率など今、日本の農業は試練の中にある。しかし、私は同時にイノベーションの時期を迎えているとも考えています。世界最高の食味を持つ米づくりを行う日本農業は今後、低コスト、収量増も含めた新たな技術革新で必ず雄飛し、明日を拓いていくでしょう」

新潟クボタの技術革新の一つに、地球温暖化対策の一環として取り組む『深耕』技術がある。これは大豆三〇〇Aプロジェクト(より多くの水分を必要とする大豆の『根を見る会』)から生まれ、作土を見直し、深く耕すことで水田の温度を下げ、猛暑に対処しようとする取り組みだ。

農作物は土づくりが命。根に栄養が十分回らなければ、植物は生長しない。昨年の猛暑による米の品質低下は遠因に根の生長不足が考えられ、現行より約三センチ深く耕すことで稲に適した環境が保たれる。



# 明日を拓く技術革新(イノベーション)

**より活力ある農業を創造しようと『活農プロジェクト』を展開する株式会社新潟クボタ。吉田至夫社長は語る。**

**「今、日本の農業はイノベーションの時期を迎えています」**

**異常気象、食糧供給、環境保全など、新たな課題が浮き彫りになる中で転換期を迎えようとする日本の農業をあらゆる角度からサポート。低コスト、効率アップ、生産性の向上といった生産者支援から関連メーカー、ホームセンターほか異業種・他業態との連携で明日の農業の可能性を拓く新技術を提供する。**

### 棚田よ よみがえれ

「当社では上・中・下越に実験圃場を設け、稲作に最適な深耕とはどういうものか、技術提案しています」

一方、新潟クボタでは、親会社のクボタが提唱する『eプロジェクト』に賛同。『耕作放棄地再生』『農業体験教室』『農作物地域ブランド・産直品PR(志のある農家応援)』『バイオ燃料用作物栽培』などの支援を行っている。「全国に広がる耕作放棄地は東京都の一・八倍に相当し、新潟でも年々棚田が失われ、豊かな田園風景がなくなりつつある。我々は耕作放棄地で数年をかけ、菜の花を植えたり、酒米をつくったり、草刈りボランティアを行っています」

昨年九月、eプロジェクトで小学生に混じり稲刈りをする吉田社長の姿があった。「文部科学省が推奨する小学五年生の農業体験に、当社もボランティアで参加しています。毎年、泥にまみれて田植えや稲刈りを行いますが、『トラクターやコンバインに乗せてあげるよ』と言うと、列ができるほどの人気になるんですよ」

新潟クボタは日本農業の「雄飛」を前に、新潟県の農業に貢献する。

農業変革期を見据え、研究・技術開発を進める。

『eプロジェクト』では、農業機械とオペレータの提供を通じて農用地としての再生を支援している。

上／『eプロジェクト』の一つ『菜の花プロジェクト』
下／『クボタ元氣農業体験教室』

問い合わせ
●株式会社 新潟クボタ
〒950-8577 新潟市中央区鳥屋野331番地
TEL 025-283-0111　FAX 025-283-0121
URL : http://www.niigatakubota.co.jp

## 技術を家庭菜園や市民農園に。「活農プロジェクト」展開中。

| | |
|---|---|
| ご利用いただける方 | ・お借入時18歳以上で、最終返済時76歳未満の方 |
| お使いみち | ・トラクター、田植機、コンバイン、農業用自動車などのご購入にご利用いただけます。(中古農機具のご購入も可能です)<br>・農機具本体のご購入に伴う付属備品、税金等の費用にもご利用いただけます。 |
| ご融資金額 | ・1,800万円以内 |
| ご融資利率 | ・JA所定の金利となります。 |
| ご融資期間 | ・1年以上10年以内(うち2年以内の返済据置可) |
| ご返済方法 | 以下の返済方法からご選択いただけます。<br>・元利均等(毎月・年1回・年2回)返済〔毎回の返済額(元金と利息の合計額)を一定にする返済方法です〕<br>・元金均等(毎月・年1回・年2回)返済〔毎回の返済額のうち元金の返済部分を一定にする返済方法です〕 |
| 担保・保証 | ・新潟県農業信用基金協会の保証をご利用頂けます。 |

◆ 詳細につきましては、お近くのJAまでお問い合わせ下さい。
明日へつなぐJAバンク
JAバンク新潟
JA／県信連

Katsuryoku Company ②

# にいがたの明日を担う 活力企業

## 株式会社 千手

十日町市中屋敷五八一番地 ● 代表取締役／柄澤 和久さん

千手温泉の源泉かけ流しの湯を熱源とするイチゴハウス。

千手小学校の田植え体験は、昔ながらの方法で。秋、自らの収穫したコシヒカリをみんなで味わう。

（株）千手では蕎麦の栽培を行い、地元の蕎麦屋へ提供している。左は手作り杵搗きで製造された餅『魚沼産こがねもち・千の夢』、上は『魚沼産コシヒカリ・千の夢』

任意組合の組合員370名全員が法人の構成員になることを目指した（株）千手。
社員は各任意組合から募り、役員を含め22名の常勤職員がいる。


問い合わせ
●株式会社 千手
〒948-0135 十日町市中屋敷581番地
TEL 025-768-3683 FAX 025-768-3897
URL：http://www.senjyurs.com


# 若者を育てよう

日本の農業が抱える大きな課題の一つに後継者不足がある。
中山間地では農家の高齢化が進み、耕作放棄地が増加。
「次代を担う若者を雇用できる農業法人をつくろう」
十日町市（旧川西町）千手地区で、農業機械の共同利用を目的に運営されていた五つの任意組合を母体に平成十七年三月、設立されたのが株式会社千手だった。
「今の農業に必要なのは、一年中就労できる仕組みづくり」
代表取締役・柄澤和久さんは言う。
「将来、会社を引っ張っていってくれる人材を求めます」

## 赤とんぼが飛ぶ田園風景を取り戻したい

幼稚園児たちがイチゴ狩りをしながらビニールハウス内を駆けまわる。「わー、ミツバチがいるよ」。株式会社千手（せんじゅ）取締役・丸山博さんが笑顔で声をかける。「刺されないように注意してね。でも、このミツバチ君たちの助けがないと、イチゴは受粉できないんだよ」。十二月から六月まで（株）千手ではイチゴが収穫され、JA十日町女性部が経営する直売所『じろばた』や温泉施設へ出荷され、「あっという間に完売」となる。冬期間は千手温泉の余り湯をビニールハウスの補助暖房と消雪に再利用。環境対策に寄与して生産されるイチゴはアイスクリームやジェラート、ミルフィーユなどに加工され、販売後はやはり完売に。

代表取締役・柄澤和久さんは語る。「イチゴ狩りのほか、千手小学校の児童を対象に稲作体験も行っています」。最近では農村でも子どもたちが農作業の手伝いをほとんどしなくなった。いや両親、学校の先生も田植え、稲刈りの体験がほとんどない。「そんな子どもたちに農業体験を通してお米の大切さを実感してもらい、将来は農業を担う人材に育っていただきたい。親御さんや先生には、食の重要性と安全を考えていただきたいんです」

十日町市川西地区は、日本随一のブランド米『魚沼産コシヒカリ』の産地だ。中でも千手地区では、最高ランクの『川西米』が穫れる。（株）千手では食味を保つため、全ての田で品質の分析検査を行っている。「美味しいと評判のコシヒカリですが、これまで食味に関する基準はありませんでした。しかし県と魚沼地域のJA等で組織する『魚沼米改良協会』『魚沼米対策会議』が魚沼産コシヒカリの玄米蛋白質含有率を六・〇％以下に定めたのです」。玄米蛋白質含有率が低いほど美味しい米とされる。（株）千手の昨年度の特別栽培米の玄米蛋白質含有率は五・〇％だった。

柄澤社長は言う。「美味しい米は土づくりから」。（株）千手では、家庭から出る生ゴミから良質な堆肥を使って土づくりを行い、平成十八年から地域の農家と協調して地域ぐるみで特別栽培米を生産している。「特別栽培米」とは、無農薬を含む「減農薬栽培」、無使用を含む「減化学肥料栽培」を総称して国が定めた農作物への表示方法を言う。

柄澤社長がこれほどまでに環境にこだわるのは、「かつて川西地区の空を群れ飛んでいた赤とんぼを増やし、少年の頃の豊かな田園風景を取り戻したい」という強い思いがあるからだ。

株式会社 千手
柄澤 和久 社長

施設事業部部長
販売・販売企画
丸山 博 取締役

PRESIDENT

## 人材を求める前に「生活できる農業」ありき

株式会社千手は、平成十七年三月、十日町市（旧川西町）千手地区で、農業機械の共同利用を目的に運営されていた五つの任意組合を母体として設立された。十八歳で就農して以来約四十年、任意組合の活動に取り組んできた柄澤社長は変わりゆく農業の姿を目の当たりにする。「平均経営面積七十五アールの当地では、大部分が兼業農家です」

昭和四十年代半ばまで着物の街・十日町では機屋（はたや）が元気で、農繁期以外は機屋に勤めに出る兼業農家も多かった。ところが徐々に機屋の数も減り、農業従事者はどんどん高齢化していく。中山間地では田畑が荒れ、いったん荒れると元に戻すまでに気の遠くなるような時間がかかる。「このままでは農業がすたれる。川西米がだめになる」

機械利用を目的とした任意組合のままでは仕事があるのは春と秋だけ。これでは次代を担う若者を雇うことはできない。「まず人を雇う仕組みをつくって、将来に希望が持てる会社組織をつくろう」。平成九年に一度失敗した法人設立だったが、説明会を平成十四年から再開。声をからして周囲を説得した。しかし設立準備を進めてきた矢先の平成十六年十月二十三日、新潟県中越地震が起きた。「千手地区でも農業ダムが損傷し、いたるところで畦の陥落や液状化現象が起こりました」。「生活再建が先だ」と設立延期を主張する人々。しかし柄澤社長は食い下がった。「せっかく二年もかけて準備をしてきたんじゃないですか。機はまさに熟しています。このチャンスを逃せば皆の意欲が下がってしまいます」。余震が続く中で幾度も持たれた話し合いを経て、（株）千手は誕生した。

ベテランの知恵と経験を生かし、次世代が継承して魚沼産コシヒカリ、魚沼産こがねもち、そば、イチゴ、トウ菜などを生産する（株）千手。「こんなに美味しいお米を食べたことがありません」といった手紙が多く寄せられる。柄澤社長は言う。「まずは生活できる農業ありき。今後は会社を引っ張っていく人材を求めます」

（株）千手の前身『千手地域機械施設利用組合』は平成4年『第21回　日本農業賞（集団の部）』で大賞に輝いた。

子や孫の健康を第一に考えた農薬低減農法で
家庭生ゴミを堆肥化した資源循環型農業を確立。